

# 序文

総合地球環境学研究所（地球研）において、2014年度から5年間の計画で Full Research (FR) がスタートした個別連携プロジェクト「高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索」（略称・気候適応史プロジェクト）の第1回目の成果報告書を、ここにお届けする。中をご覧いただければ分かるように、本報告書は主に初年度である2014年度の活動の記録であるが、既に刊行の時点で2015年度も最終盤になってしまった。刊行が遅れた最大の原因は、プロジェクトリーダーである私をはじめとした地球研のプロジェクトオフィスメンバーによる原稿の執筆・編集の作業が遅れたことにある。早くから原稿を提出していただいていた多くのプロジェクトメンバーの皆さまに、深くお詫びする次第である。

気候適応史プロジェクトは、現時点で5年計画の2年目が過ぎたところだが、実際には、2010年度の Incubation Study (IS)、2011 - 12年度の Feasibility Study (FS)、2013年度の Preparation Research (PR) を経て来ており、既にその開始から6年の歳月が過ぎた。それゆえ本報告書の業績リストに記されているように、プロジェクトメンバーの皆さんによる数多くの研究成果が、既に著書や雑誌論文、あるいは講演などの形で、続々と世に出されつつある。本報告書には、プロジェクトのこれまでの活動、特に2014年度の活動を丹念に記録すると共に、プロジェクトメンバーの皆さまの協力を得て、プロジェクトにつながるの深い新しい論文を中心に収録している。

地球研の研究プロジェクトは「文理融合」を本旨とすることが、半ば義務付けられているが、地球研が設立された2001年の直後には、「研究成果の大半は理系のもので、文系はほんの少し」といったプロジェクトも多かった。その点、この気候適応史プロジェクトは、プロジェクトメンバーの数の上では、ほぼ完全に「文理対等」な構成になっており、本報告書にも、文理双方の立場から、ある意味で互いに全く異質な研究論文が掲載されている。

ここに収められた論考が、あと3年間のプロジェクトの中で、今後どのように「融合」して、更に地球研の設立の目的である「地球環境問題の解決に資する研究成果」に育って行くのか。そのすべては、今後のプロジェクトの展開に掛かっている。本報告書を手にとられたプロジェクトの内外の皆さまから、忌憚なきご意見・ご助言を頂ければ、と思う次第である。

気候適応史プロジェクトリーダー

中塚 武